菊陽病院だより

KIKUYO HOSPITAL NEWSLETTER 2016 NO.25

ごあいさつ

院長 和田冬樹

酷暑の続く毎日ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。わたしと同じようにリオオリンピックでの日本人選手の活躍に胸躍らせ、イチローの偉業に感動し、被爆や戦争の歴史に思いを馳せたりされて過ごされているのではないかと思います。

熊本地震から4ヶ月目が過ぎようとしています。今でもたまにある余震に対しても、わたしはいまだにアドレナリンが高まったりして過覚醒反応を経験しています。当院の被害は、幸い比較的軽くて、診療本体への影響も一時的なもので、すぐに通常診療を再開することができました。県内の被災病院の患者さんを受け入れ、精神科救急システムの支援や地域訪問などに取り組みました。スーパー救急病棟を標榜している精神科病院として微力ながら地域への貢献ができたと自負しています。振り返ってみますと、職員自身が被災する中、車中泊や家族の心配を抱えながらでしたので、診療維持できたのは、全職員と支援者の方々の奮闘のおかげだと思っています。発災直後から全日本民医連をはじめ多くの方々による物心両面の支援に大いに助けられました。特に全日本民医連の迅速で機敏な組織的対応には、DMAT／DPAT等の災害支援チームにも匹敵する支援だと驚きを禁じ得ませんでした。平田宗男先生が民医連加盟を決断された熊本大水害の時も、全国からこの様な御支援を頂いたのだろうと思いました。被災職員の休養にも配慮した支援や精神科医師支援によるメンタルトリアージ面接など、他に類を見ない素晴らしい支援活動ができたと思っております。支援に馳せ参じて頂いた多くの支援者と被災しながら奮闘した職員に対して「お疲れさま、有り難うございました」と紙面をお借りして改めて感謝の意を表したいと思います。

熊本地震発生からの経緯

4月14日(木)　21:26 前震発生(震度7/M6.5)
新館・別館エレベーター停止
LPガス・都市ガス使用不可

4月15日(金)　病院災害対策本部立上げ
希望ヶ丘病院より14名の入院患者受入
井水混濁のため、使用不可
エレベーター停止のため、職員のリレーによる配膳作業
地域の車中泊訪問、避難所訪問開始

4月16日(土)　1:25 本震発生(震度7/M7.3)
別館スプリンクラー作動のため、別館浸水
福岡県民医連より2,000ℓ、井水業者より150ℓの水の支援

4月17日(日)　自衛隊給水支援2,000ℓ
ユートピアより患者2名受入
デイ・ナイトケアは中止を決定
全日本民医連藤末会長来院

4月18日(月)　宮崎農民連食糧支援
厚生労働省より被害状況確認の電話あり
職員に向けて炊出し開始

4月19日(火)　自衛隊給水支援2,000ℓ
セントラルキッチン食糧支援
菊陽町・合志市と訪問についての懇談

4月20日(水)　LPガス復旧

熊本地震、菊陽病院の被災状況と復旧活動
～支援者の方々と共に～

写真提供：野田雅也氏

写真提供：野田雅也氏

医局図書室

大津町瓦礫撤去

軽運動室

大会議室

	吉田病院：中谷医師支援
	九州社医研：田村医師、菊陽病院入り
	病院地域訪問体制表作成
	菊陽町片付けボランティア
4月21日（木）	新館エレベーター復旧
	くわみず病院外来・菊陽病院オンコール医師支援開始
	緊急県連理事会開催
	梅林建設による被害状況確認
	職員メンタルトリアージ実施開始
	くすのきクリニックへ事務支援実施
	くわみず病院へ検査技師支援実施
4月22日（金）	さわ病院より支援の打診有
	熊本県精神科協会の依頼でDPATへ看護師を登録
4月23日（土）	全日本民医連からの土曜半日直・宿直医師支援開始
4月24日（日）	小・中学校の休校に伴い、職員の子どもを院内保育所で受入れ開始
	水道復旧
4月25日（月）	熊大病院精神科・厚労省医師との懇談
	デイケア再開
	職員のIES-R（出来事インパクト尺度）実施
4月27日（水）	西原村地域訪問
4月28日（木）	都市ガス復旧

4月15日 希望ヶ丘病院より転院の患者さん受け入れで騒然とした外来

4月17日 全日本民医連藤末会長現地入り

4月20日 中谷医師支援。激励のごあいさつ

復旧作業

復旧作業

給食配膳

給食配膳リレー

4月28日(木)	全日本民医連からの保育士支援開始
4月29日(金)	職員向け炊出し終了
	職員向けの保養企画案内
4月30日(土)	さわ病院:澤医師・渡邉医師と支援について懇談
5月 1日(日)	友の会会員宅訪問開始
5月 3日(火)	希望ヶ丘病院より受け入れた患者を希望ヶ丘病院へ転院
	芳和会大石理事長職員激励のため来院
5月 4日(水)	和田院長・橋本副院長・矢野総師長で益城病院訪問
	全日本民医連からの支援者の宿泊受け入れ
5月 7日(土)	別館エレベーター復旧
5月 9日(月)	作業療法、デイ・ナイトケア再開
	オリブ山病院:仲里医師・林心理士、支援
	保育所の子ども受け入れ終了、通常保育再開
	全日本民医連より精神保健福祉士支援開始
	歯科診療支援開始
5月11日(水)	全国の支援物資を病院で受け入れ
5月16日(月)	職員のIES-R実施(2回目)
6月13日(月)	友の会会員宅訪問(2回目)開始
6月24日(金)	地域の車中泊訪問、避難所訪問終了
6月27日(月)	オリブ山病院・徳医師支援開始
7月13日(水)	梅林建設による復旧工事開始
7月28日(木)	くわみず病院外来・菊陽病院オンコール医師支援終了
8月12日(金)	職員向け地震対応振り返りアンケート実施
8月26日(金)	歯科支援終了

「震災後全国からの支援状況」

栄養士 木村あや

4月14日21時26分前震、4月16日深夜1時25分の本震発生後、全日本民医連からの人的支援・物資支援が開始されました。

菊陽病院は停電することなく、栄養科の厨房のIHコンロや洗米機や電気炊飯器、スチームコンベクションオーブンなどが使用でき、ご飯やおにぎりの提供が出来ました。町水や井戸水は、地震の影響で濁りはじめたので、全国からの支援物資（ミネラルウォーター・飲料水）、自衛隊の給水支援で4月22日の復旧まで困難を乗り切りました。調理用の回転釜は、都市ガス復旧の4月28日まで使用することができなかった為、献立変更を行い対応しました。食器洗浄機は電気で稼働できましたが、お湯はガス給湯システムの為、給湯できなかった期間はIHコンロでお湯を沸かし、すすぎ用の仕上げとして使用しました。エレベーターが4月15日から4月22日の期間停止していた為、全日本民医連の支援者や職員の協力で1階から5階まで、階段を利用して人海戦術で病院給食の配膳を行いました。

地震発生直後から数多くの支援物資が届き、4月15日から6月7日までの間に、延2,950食の震災関連支援を行いました。支援物資は、入院患者や外来患者、グループホームの入所者や支援者、ぽっぽ保育所緊急受け入れの子ども達への食事の提供など幅広く食材として利用させて頂き、避難所の車中泊の方には、野菜サラダや果物、リンゴジュースなど提供し、大変喜ばれました。

農民連のみなさんより届けていただきました

自衛隊による給水作業

全国から届いた支援物資

支援物資（水）

職員のメンタルヘルス

副総師長 宇野木照代

災害や事故・事件によるショックで、こころは大きなケガをしてしまいます。こころがケガをすると色々なことがおこります。些細なことでイライラする、夜眠れない、その時の夢を繰り返し見る、その時の光景が何度も思い浮かぶ、誰とも話す気にならない・・・などなど。また、からだの調子にも影響することがあります。
被災直後は、全職員の3割が避難所・親せき宅・車中泊の状況となりました。

職員自身も被災者である中で、住居の心配・子どもさんのこと・高齢のご両親・友人のことなど様々な不安と緊張の中、日々の業務に追われる状況が続きました。
患者さんや地域の住民のいのちと健康を守ると共に、働く私たちの健康を守ることが重要であると考えて職員へのメンタルセルフチェック(IES-R※1)を実施しました。

1回目のセルフチェックでは、約4割弱の職員に震災による心身の変化が見受けられました。2回目のセルフチェックでは、4割から約2割と減少しましたが、まだまだ心身の変化が生じている状態が続いており、更に、2割強の職員が抑うつ症状を呈していることが分かりました。これらの結果を受け、現在もなお医師・心理士による面接を実施するなど、必要な対応を行っています。

被災後3カ月を経過すると、これまでの疲れが表面化しやすくなります。また、日常生活を取り戻すスピードに大きく個人差が生じる時期でもあり、抑うつ感や取り残され感などを強く感じる方も多くなると言われます。職員、ひとりひとりを守り、共に働くことができるように、今後も職員へのメンタルヘルスケアを継続していきたいと思います。

※1.IES-R(出来事インパクト尺度)＝強いストレスを伴うような出来事にまきこまれた場合に後になって生じる症状を測る質問紙

全国の仲間と取り組んだ支援活動

精神保健福祉士 村上幸大

想像もしていなかった4月14日の前震。しかし発災の翌日には九州内の民医連の事業所から、4月20日には全国の民医連事業所から物的支援や人的支援を頂き病院の復旧にあたりました。4月24日からは病院内の復旧と並行して、瓦が落ちて壁も崩壊した地域の公民館や高齢者世帯のご自宅の瓦礫撤去なども行いました。北は北海道、南は沖縄まで、様々な地域から来られた支援者には聞きなれない熊本弁の通訳が必要な場面もありましたが、雨の中泥だらけとなりながら病院や周辺地域の復旧に尽力してくださった全国の支援者の一生懸命な姿勢に胸が熱くなりました。地震の爪痕は深く未だ復旧の途にありますが、全国からの支援を頂いたことで、人のつながりが大きな支えとなることを改めて感じました。この思いを忘れることなく日々の支援を続けていきたいと思います。

敷地内に断層が走る公民館

ガレキを積んだダンプ

地域訪問の取り組み ①

副総師長 斎藤ひろみ

4月18日から、菊陽町の避難所とグランドなどで車中泊をされている方に声をかけ、困っていることや要望の聞き取りを行いました。その後、行政に「菊陽病院で出来ることはありませんか？」と相談。避難している方の声を聴き、行政と連携しながら訪問活動を始めました。菊陽町・大津町からは車中泊、合志市は避難所への訪問協力を依頼され、4月22日から訪問を開始しています。4月27日から西原村の4つの区長と元職員の要望で500世帯の訪問を実施しました。要求を聴き、行政と情報共有しながら、医療ニーズは保健師に繋ぐようにしていきました。

「とにかく聞いてほしい。聞いてもらうことで落ち着く」と口々に言われ、話を傾聴することが一番の役割でした。住民の方々から、県内外から、支援者が多数来てくれていることに驚きと感謝の声が寄せられました。県外の支援者には気持ちを素直に話せている印象があり、怖かったこと、継続して起こる余震と今後の生活の不安など気持ちの表出ができたようです。

聴き取りを行い、非常食や衛生物品、飲料水等を配布しました。特に野菜不足を訴えられており、栄養科で準備したサラダなどは大変喜ばれました。
また、行政と協力し、弾性ストッキングやパンフレットを配布しながらエコノミークラス症候群の防止を呼びかけていきました。

車中泊の理由は、ペットがいることや、小さい子供がいて避難所で気を使う、自宅に居ることが可能でも子供が怯えて自宅に入れない、いつ地震が起こるか不安でたまらない等でした。

エピソードとして、車中泊の訪問に入ることは、行政と警察に伝えていたにも関わらず、不審者情報が飛び交い、「変な輩が声をかけている。」と通報されることもありました。混乱の中で益々不安を掻き立たようです。安心して訪問を受けていただけるように、行政からの助言もあり、訪問時間を18時半から20時半までとし、民医連のビブスを活用したこと、繰り返し訪問したことで認知されたようです。突然起きた災害により日常生活が一変。多くの方々が不自由な生活を余儀なくされた今回の震災です。地域を守るという民医連の方針のもと、今後も私たちができることを進めていきたいと思います。

菊陽病院でできることはありませんか？

地域訪問の取り組み ②

歯科医師 山口彩子

今回の地震が発生したのち、歯科には全国よりたくさんの歯ブラシや義歯ブラシなどの支援物資が届きました。阪神淡路大震災や東日本大震災の時には、震災関連死の原因として肺炎が多かったので、当院歯科では避難者や高齢者施設での口腔ケアをしてまわりました。断水で水の出ない中での口腔ケアは思ったより困難で、加えて高齢者など長引く避難生活で気力体力ともに弱ると、肺炎にかかりやすくなります。せめてお口の中はキレイに保って、肺炎を引き起こす細菌を減らしたい一心で活動を続けました。

写真は大阪から支援に来ていただいた歯科衛生士です。
場所は本田技研体育館

災害時のオアシスとなったぽっぽ保育園

保育士　川上隆子

震災後多くの学校や認可保育園が休校休園しており、子供を家に置いては出勤できない職員のために、保育所で学童の受け入れを行いました。4／18～5／9まで、病院職員の子どもや孫54名と、菊陽ぽっぽ保育園に在籍する園児34名が震災後の保育を利用しました。

保育園職員も被災して体制が取れない中、卒園児の大学生、中高生が8名、職員の友人が4名ボランティアに来て下さり震災後の保育を乗り切ることが出来ました。ゴールデンウイークには奈良民医連土庫病院ひまわり保育所より、3名の保育士が交代で支援にも来て下さり、民医連の連帯を強く感じました。

1週間は保育所で学童保育、給食提供を行い、2週間目より、病院別館の職員食堂を小学生の居場所として整え、保育士とボランティアで学童保育を行いまいした。晴れの日は中庭で思い切り体を動かしあそび、室内でもゆったり過ごせるよう工夫をしました。小中学生、ボランティアの昼食は栄養科が準備しました。避難生活で大変な中、温かくておいしいご飯が食べられるのを子どもたちはとても喜んでいました。

日中、保育園で地震の怖さを忘れて、同世代のお友達と思い切りあそびストレスを発散。時にはボランティアのお兄さんお姉さんに甘え、「また明日も来たい！」と言ってくれるほどに楽しんでいました。保護者である病院の職員からも、「とても助かった！」「安心して働けた」「子どもが楽しんでいて良かった」などの声がありました。

災害時の職場保育所の役割は「職員の勤務の保障」と「子どもたちの安心安全な（心も）居場所づくり」だと改めて感じました。

卒園児が毎日ボランティアに来てくれました

奈良のひまわり保育園より保育士支援

KIKUYO HOSPITAL

菊陽病院

〒869-1102 熊本県菊池郡菊陽町大字原水5587
TEL：096-232-3171　FAX：096-232-0741

ACCESS

熊本市中心部より『車』で ……約30分
熊本インターより『車』で……約10分
三里木駅より『徒歩』で ……約15分
JR豊肥本線 三里木駅を目印にお越し下さい。

発行責任者　菊陽病院 事務長　久保田俊平